

---

# 公門公が消えた

みなきゆきなみ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

公門公が消えた

### 【Nコード】

N0519Z

### 【作者名】

みなきゆきなみ

### 【あらすじ】

公門公が消えた。公門公はつい数週間前に大学二年生になったばかりで、女の子で、ついでに言うとな僕の高校時代からの同級生だった。いつも声を荒げず物静かな彼女は、簡単に言うとな少しお堅い人間だった。常に社会の規律を意識し、周囲にもそれを諭すような人間だったのである。（サイトと同時掲載）

くもんきみ

公門公が消えた。

公門公はつい数週間前に大学二年生になったばかりで、女の子で、ついでに言うとな僕の高校時代からの同級生だった。今時の大学生では少数派となってしまった黒髪と、一昔前の委員長キャラのような細いフレームの眼鏡を特徴とし、いつも声を荒げず物静かな彼女は、簡単に言うとな少しお堅い人間だった。常に社会の規律を意識し、周囲にもそれを諭すような人間だったのである。

そしてその性格ゆえか、公門公は大学に進学してから気を病む日々を過ごし続けていた。

高校時代、僕と公門公は特筆すべき間柄でもなく、目があったら挨拶をするようなごく普通の同級生でしかなかった。そんな彼女と僕が同じ私大の法学部に入学したのは単なる偶然で、そのことにより公門公との関係が変化することは全くなく、彼女とはキャンパス内ですれ違ったら手を振るようなそんな距離を保っていた。

だから公門公の様子が変わったことに気付くのに、僕は入学してから一年の時間を要した。いつも通り大教室の授業で、定刻の五分前には入室し前の方の席を陣取る彼女の後ろ姿を見ていた僕は、彼女が最近ことあるごとに周囲をきよきよと見渡すことに気付いたのである。そしてその要因は、彼女とそれ程親しくない僕にでも安易に想像できることであつた。

公門公と僕が入学した私大はそれなりに名の通った大学であるとは言え、指定校推薦を受け付けていることから学力や授業態度の差異は学生の中になりに顕著なものとして横たわっている。少人数の講義であればある程度の抑制は効くのだが、大教室の授業になると様々な態度の学生が揃い、結果として私語で講義内容が聞き取れなくなることも間々あつたのであつた。そう言つた公的な場所での規律を極端に意識する公門公である、その様子を神経質に気にしてい

るであろうことは彼女の背中からでも読み取れた。

その公門公が消えた。

帰宅途中の駅のホームで姿を目撃されたのを最後に、姿を消したのだと言う。

公門公が死ぬ数十分前、僕は彼女と同じ講義を受けていた。それはいつもと同じ大教室での講義で、三桁の学生を内包する室内には、案の定授業を聞くつもりもない学生らの私語が響き渡っていた。僕の三、四列前の席に腰掛ける公門公は、例の如く私語に耐えられなくなったのだろう、神経質にその肩を震わせていた。

公門公の気持ちも分からないでもない。何かを学ぶつもりで来ている人間にとって、微塵もその気がなくただ時間を潰すために教室に居座っている学生らの存在は疎ましいことこの上ない。だがしかし、教授が注意しても何の反省も見せずに数分後にはまた話し始める彼らのことである、僕ら同じ学生が言ったことで嘲笑って誤魔化すだけだろう。僕はそう諦めていたし、僕のように考えていた学生も少なからずいただろう。

だがしかし、公門公は違った。僕が見つめる中で公門公は突如立ち上がり、鬼気迫る表情を背後の学生らへと向けて叫んだのだ。

「あなた達、そんな自己中心なことばかりしていて恥ずかしくないの！？ 私語をしている人達は自分の刹那的な楽しみだけを考え、周りの迷惑を何ら顧みていない！ 人間は社会的な動物じゃないの、あんた達は何も社会のことを考えられない。人間じゃないわ、知性がない動物よ。私は動物園に通っているつもりはないわ、さっさとここから出て行ってよ！」

その公門公らしくない大声と暴言に、僕は耳を疑ってしばし言葉を失った。教室内は水を打ったように静まりかえり、誰もが公門公を見つめている。やがてひそひそと呟く声が波立つように起き、ところどころからは嘲り笑うような大声が木霊した。だがしかし、公門公は表情を変えないまま吼えるように再度口を切る。

「ここに居るあなた達はもう二十歳を過ぎたか、或いはそれに近い

年齢でしょう！？ けれど態度は幼稚園と変わらないじゃない。幼稚園ならまだ教育も受けてない段階だからこれくらい私の私語があってもまだ分かるわ、けどあなた達は小学校から高校までずっと教育を受けてきたのよね？ 今まで何をしてきたの？ 社会に育てて貰って未だ個人のことしか考えられないなんて、屑以外の何者でもないわ。社会にとってあなた達は不良品なのよ、存在の価値がないゴミなのよ。これ以上存在しても社会の負担になるだけだから、早く消えてくれない？ ほら消えてよ早く消えてよ、これ以上他人に迷惑をかける前にさっさと消滅しちゃえばいいのよ！ 社会はそれを望んでいるわ、このろくでなし共がッ！

吐き捨てるようにそう言い放った後、公門公は自らの鞆を引っ掴んで大教室を飛び出していった。気味悪がるようなざわめき、馬鹿にするような爆笑が教室のあちこちから飛んでくる。教壇に立つ年若い講師はそれを抑えようと懸命になっているが、その勢いは留まるところを知らないようだった。僕は教室を一旦見渡してから、鞆に文房具と教科書を押し込んで教室を出た。

公門公は教室を出て少し歩いた先の、中庭の桜の木の下で蹲っていた。しとしとと降る雨がそのかつちりとしたシャツの背中を濡らしているが、されど彼女はそれすら気にしていないようにぶつぶつと何事かを呟いている。そんな彼女の肩を叩いた僕に、公門公は何かに取り憑かれたような表情で口を開いた。

「ねえ、私は間違ってる？ 私は間違つてないよね？ それともあいう風に自分のことだけを考えて私語をする人たちの方が正しいの？ 満員電車の中で大声で携帯電話を使う人の方が、車内で足腰の悪そうなお婆さんの前で化粧道具を広げてメイクをする人の方が、ヘッドホンから音漏れをさせている人の方が、行列に横入りする人の方が、雨の日にコンビ二の傘入れから傘を盗む人の方が、道いっぱいに広がって歩いて通行の邪魔をする人の方が、歩き煙草を吸う人の方が、痰やガムを吐き捨てる人の方が、大音量でエンジンを吹かせてバイクを運転する人の方が、空き缶を人の家の前にポイ捨て

する人の方が、そう言った人の迷惑を顧みない人の方が正しいって言うの？　ねえどっちなの？　皆何で平然とあんなことをするの？　皆何でそんな人を注意しないの？　わ、私は、私は間違っていないよね？」

縋るような公門公の言葉に、僕は何の反応もすることが出来なかった。公門公はそんな僕に何かを告げているつもりなのか、それとも独り言のつもりなのか、焦点の合わない瞳でこちらを見据えながらさらに続ける。

「人間は社会的な動物よね？　社会があるからこそ人間は生きていけるんだし、だからこそ私達は社会を構成する者の一人だって自覚を持って行動しなきゃいけないよね？　社会に育ててもらって社会に居るのだから、社会の規律を守って社会に貢献しなきゃいけないよね？　そうでないと社会は成り立たないもの、そうよね、そうよね？　何で皆あんなに自分勝手なの、何で皆あんなに自分のことしか考えていないの。ああいった人間を正すのは間違っていないよね？　私は正しいよね？　間違ってるのはあっちよね？　私は、何かおかしいことを言っているかしら。これは当たり前よね？　常識よね？　分からない分からない分からない。あの人たちは一体何を考えているの？　皆は何でああいった人たちを黙認しているの？　ああ、私は、私は私は私は、何か間違っているのかしら。分からない、分からない分からない分からない分からない……」

そう言っただけで亡霊のように立ち上がった彼女は、既に僕がここにいるということを認識していなかった。降り注ぐ雨を払うように体を震わせ、顔を高く上げて恨めしげに空を仰ぐ。大丈夫か、と僕が問う言葉にも彼女は何の反応も見せなかった。ただぶつぶつと熱になされるように独り言を呟きながら、ゆらゆらと歩いてその場を立ち去っていく。その後ろ姿を、僕は見つめることしか出来なかった。

そしてその会話として成立していない会話を最後に、公門公は二度と僕の前に姿を現すことはなかった。

僕が最後に会ったときと全く同じ、精神を破壊されたかのような様子で帰りの電車に乗った彼女は、車内で大声で携帯電話を使う大学生を見つけ半狂乱になりながらそれを取り上げたいらしい。泣きながらヒステリックに携帯を踏み付ける彼女は周囲の乗客に捕まり、次の駅で降ろされた後被害者と口論していたそうだ。そして彼女は、頭に血が上った挙句相手をホームから突き落とし、そのままその場から逃走したのだと言う。彼女の行方は現在搜索されているらしいが、未だ発見されていない。

「苦しい。苦しいわ。社会を息苦しくしているのはあなた達かしら、それとも私？」

公門公が姿をくまます直前、彼女は近くにいた人物に壊れたように笑いかけたと言う。まるで何事にも疲れたかのような自虐的な表情で。笑っているのに泣き出しそうな、非常に不安定な表情で。

それが、彼女の最後の言葉だったらしい。

その日は雨が降っていて、公門公が消えた日を思わせた。彼女の目撃証言を募るポスターが貼られた駅構内で、僕は電車を待っていた。

周囲には様々な人がいる。ヘッドホンからドラムの音を漏らしている人。人がいる近くで雨粒のついた傘を降る人。電車を待つ列に並ぼくとせず、扉が開いた瞬間横から入る人。車両から出る人のことも考えず、扉の前に堂々と立つ人。邪魔そうな顔をされても扉付近から動こうとしない人。

そんな人達を少しの苛立ちを持って見つめながら、僕はポスターに印刷された公門公と視線を合わせた。

公門公が消えた。

何故彼女は消えたのだろうか。

病的なまでに社会への帰属を主張した彼女は、彼女の理想に反する現実で苦しんで、そこから逃げ出したかったのかもしれない。彼女にとって、この社会は正直者が馬鹿を見るものに見えたのだろう。

周囲を顧みず社会を顧みず将来を顧みず、楽しむだけ人生を楽しんで、謳歌するだけ人生を謳歌して、そんな人々が少なからず存在することに社会を気にした彼女は耐えられなかったのかもしれない。あまりにも理想論な話である。

だがしかし、彼女の価値観を全否定することは出来ないにせよ、全肯定することも僕には難しい話だった。

人間が社会的な動物であり、少なからず社会に貢献する必要があることは認めよう。だがしかし、社会の構成員であることと個人としての人間であることは同列の事柄として前提として横たわっているはずだ。多少の程度の差異はあれど、個としての己を持ちそれ故に社会に反することも、人間ならば少なからずあるはずなのである。人間個人にとって、社会とはどれ程に価値を持つものなのか。己を殺してまでも従属するほどの価値のあるものなのか？ 無論社会がなければ今の自分は成り立っていないが、だからと言って社会のためにも今の自分の全てを殺す必要はないはずだ。

ホームに流れるアナウンスを聞きながら思う。

僕は、公門公に糾弾されるべき存在なのかもしれない。

だがしかし、僕はその僕を変えようとは思わない。彼女と僕の選んだ価値観は、全く違うものなのだから。

ホームに電車が入ってくる。公門公のポスターから視線を逸らす。そのまま僕は歩き出す。僕が選んだのは人混みでこった返す道だ。僕と公門公の人生は、ここで完全に分かれたれている。

一風変わった同級生の、その行方をくらました先のことを思い、僕は一度だけ背後を振り返った。

ホームに溢れる人々が、互いの脇をすり抜けたり、時折肩をぶつかけたりしている。そんな光景が、そこにはあった。

公門公が、消えた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0519z/>

---

公門公が消えた

2011年12月1日22時49分発行